



第130号

発行所	上高井教育会
発行人	上高井教育会長 明長 治男
編集人	森山 一 会報編集委員 須坂 新聞社
印刷所	須坂 新聞社

本年度教育会活動の回顧と課題

上高井教育副会長 赤堀昭三

上高井教育会の本年度の活動を回顧するに当たって、今後の課題を含め、次の三点から考えてみたい。

一つは、教育会の活動の中心である研究委員会についてである。

本年度の研究テーマは、「子どもがねばり強く自己形成していくための指導の在り方」の追求にあった。このテーマを例えれば社会科では「子どもがねばり強く自己形成していくためには、社会事象に対する子どもがどのように考え、行動するか」となり、算数・数学科では「子どもが自ら問題を解決する力を育てるには、問題解決的学習過程こそが必要」となり、また、理科では「子どもが自ら体験し、その中から疑問をもち、自らの考えで追求し続ける姿」だととらえて、研究授業を通して、その授業の分析・改善への仮説とその仮説の検証というプロセスを積み重ねてきた。

三月末には、その成果の一端を冊子として世に問うことになる。研究委員会の諸先生の研究、ご努力に感謝するし、だいである。各研究委員会の運営については、研究授業のこと、研究時間のこと等数多くのご苦労があったこと、そして課題を残したことにしても、来年度解決せねばならぬことは多い。

さて来年度は中心講師三枝弘先生のご指導をいただいでから十年目を迎えることになる。私は、この十年目を出発するに当たっては、先生のご指導の中みを会員が新たに学習することが必要だと思ふのである。もっと言えば三枝先生の教育理論を学び、そしやくすることから始め直すことだと思ふ。

上高井教育会百周年記念誌「上高井教育の歩み」に三枝先生の論説が収められている。先生の論説が「本然・限界の世界」の一文である。同書P.355には、先生からご指導いただいたプロセスが記述されている。また、過去六年間の研究集録が「子どもが自ら創りだし追求する学習」というテーマ表題

で二冊にまとめられている。

私たちは、来年度、再び三枝先生から、ご指導いただくに当たり、これらの研究資料を熟読理解することが必要であらう。さもなくば、出口のない迷路に気づくことなく当てのない研究を進めていくことになりかねない。三枝先生の視点に徹することから、研究を始めることよって、教師としての自らが創り出されるチャンスが生まれるのだと思ふ。

二つめは、同好会運営と活動についてである。

本年度も十三の同好会、それぞれが研鑽の道にいそしんできた。そして、その成果をあるいは、研究発表会の場で、あるいは、会誌、会報の場で、あるいはは、展示会場で発表してきたことは、同好会の発展のために喜ばしいことである。しかし、多くの課題（悩み）と言ったほうがよいが、残されていることも事実である。「参加者が少ない」「時間がかからない」「予算が乏し

い」等々の悩みである。同好会と研究委員会は教育活動の両輪にたとえられている。私も、同好会が活発化することが、日常の教育活動を支えていく為の大きな力となることだと思っている。先輩から「教師は一つ得意なものを持って」とよく言われてきたし、教科にかかわる素材に対する理解の深さは必ず日常の授業に役立っている。

私は、同好会への参加者を見たとき、20代、30代の先生方、そして女子会員の先生の奮起をうながしたい。自らを求道の灼熱のなかに置いて、叩かれ、錬磨されることから逃げていてはいけない。そこには、なまくらな鉄にしかなり得ない自分があるだけである。求道の場合は、なにも同好会で学ぶことだけであるのではない、という主張もあるが、会員が職場をこえ、年齢を、男女の違いをこえて、互いに研鑽するなかから創りだされる気風が教育会を支え、また、終生の友を得ることにもなるのではなからうか。

三つめは、研究発表会、女教師大会、教育懇談会等の事業について。これら、会員の発表、あるいは、意見交換の場が感動的であったことである。日々の多忙な一ときをさいて、一堂に会した会員が語り合うことよって連帯が生まれ、教師集団が育つのである。

最後に、教育会活動の主役に先生方一人ひとりがなっていてほしいと願うものである。

(常盤中)

(常盤中)

上高井教育会だより

1. 10 研究委員会世話委員長会(3)
- 14 第41回県女教師研究大会、於佐久創造館。
- 24 同好会世話係会長会(3)
- 6 第8回常任委員会。
- 9 第9回代議員会。
- 16 上高井教育会報第130号発刊。
- 18 第9回常任委員会。
- 28 第10回代議員会。
3. 7 上高井教育会誌第45号発刊。

郷土の文化財 ⑧2

飯田郷元神社 (小布施飯田)



高井鴻山が揮毫した大軸は全部で二十四点余が伝えられ、明治十二年には六千点揮毫されたといわれ、この軸もその中の一つで、鴻山七十歳の時に揮毫されたといわれる。

二流一対でつくられているこの軸は、長さ十・三五メートル、幅一・一〇メートルもある大きなものである。

言葉は「肅難維徳」「放恵は維れ徳を肅し、恵は萬國に放つ」と読む。肅難の難は難ではなく、つつしみやわらぐの意であり、放恵の放は放ではないとする説もある。

郷之神社は昔千曲の洪水を避けて一段高い段丘上に移って今日に到っていること知られている。(山岸)

本年度の実践をふりかえって

本年度も残り少ない日々となりました。各校では一年間の教育実践をふりかえり、反省・まとめの時期をむかえておられることでしょうか。ここに4名の先生方に貴重な教育研究をお寄せいただきました。ともども味わいながらこの1年間を省みたいものです。

丁生の成長を願って

造形表現に見る丁生の心情の深まり

松本博人

本郡にお世話になり二年目を迎えました。年度の初めに、郡市教科会(美術)の研究授業をお引き受けしました。ここにその一端を記したいと思います。

本校では、来年度から校舎改築が予定され、三十余年の木造校舎で学ぶのも最後となりました。そこで、生徒に描かせる題材として、この校舎を選び、生き生きと描かせたいと考えました。しかし、校舎という対象をそのまま描かせることは、技術的な指導におちいりやすく、美術科、本来の目標である「豊かな心情を培う」ことにはどの様に結びつけていけば良いのか、それが重要なポイントとなりました。

六月のある日K子は、グループノートに次のように書いてきました。「私は今Iさんと廊下掃除をやっているけど一ヶ月間やって、ピカピカにする」こんな目標持ってるよ。皆なも、目標作ってみて!」きつと「よし、やらなきゃ!」って気になるよ。

来年、校舎こわれちゃうよね。どうせ消えちゃうなら、私達の心の中に、ピカピカできれいな校舎を残しておこうよ。私達が、最後にこの校舎を使うことになるんだから。」

K子の、このような心情を一人でも多くの生徒が、より深く理解し、自らも意欲的に校舎にかかわることが出来れば「校舎(対象)への想い入れ」が一層強まることになり、その心遣いの中で、造形表現させることが、豊かな心作りにつながると思えました。

T生は、忘れ物や私語が多く、朝の部活も遅刻しがちで物事を簡単に捉え、また、落ち着きがなく、その場その場を、表面的に生きる。そんな状態でした。しかし反面、人なつこく、話し好きで、甘いん坊。地味な努力は苦手でも、関心を向けたことは、興味深く取り組む。

紙面の関係で詳しくは記せませんが、具体的な手だてとしては、次の事を主に扱って心を深めようと試みました。

- 一、校舎への想いを文章で書いて、考えをまとめる。
- 二、労作(清掃など)など体を通して、校舎を自分なりに見かえす。
- 三、有名な作家の絵画作品を、多く観察する。
- 四、本校創立当時の様子をY先生にお聞きして、感想をまとめる。
- 五、自分が表現したい、表現主題を明確にして描く

この学習の中で、T生は、次の様な感想文を書いた。「僕は今まで、絵を描くとかいうのを簡単に考えすぎていた。絵にはいろんな表現があって、どれも作者の個性みえないものが出てくる。僕も自分だけの絵みたいのを描きたい。」他の人の絵と比較し、劣等感からか、とかく筆の進まなかったT生。

今回は「気に入るまで描きたい」と、三枚も木造校舎への想いを追いかけることが出来ました。(相森中)

本年度の実践をふり返って

「社会」——O工場の教材化——

今井俊彦

こへ見学へ行こうか大変迷ったものでした。先輩の先生方から、お聞きしたりして、いくつか当って見たのですが、教科書のような展開にいきそ

うもない(これがそもそも間違っていたのですが)結局、学校のすぐ隣りのO工場やろうと決意しました。O工場は、新聞の経済面に取り上げられていたり、ロボットが導入されていたりすること。それに、工業学習で、世界の日本の工業へ目を向けさせていける「輸出」がされているというのを聞いたからでした。さて、およそのくらいうわべだけの教材研究で授業に入ってしまったものから、後が大変でした。

以下、この単元を終えた私の感想を書いてみたいと思います。私が、小中の頃、工業学習で勉強したのは、四大工業地帯とか、大量生産(もちろん今でも)といったことが主だったし、私の工場観もそのくらいのものでした。けれど、現代の工場は、それでは古いというのが実感です。今の工業・工場は、そんな一面だけではとらえることのできないむずかしさがあることを教えられました。ひとつは、「多種少量生産」という言葉です。工場の種類などにもよると思いますが、今の工場は一つ、二つの製品を大量生産するだけではやっていけない厳しさがあるのです。常に製品のことを考えている。ある製

品が下火になっても、次の製品が出てくる。そして、自分の工場で生産できる製品をたくさん考えているということ。そういう工場同志、「異業種交流会」を開いて、研究し合っているのだそうです。もうひとつは、下請(関連工場)の存在です。昔のような完全な下請的存在は薄くなってきているのです。親企業が斜陽になってもつづれないように、様々な工場から、発注を受けて、対処している点です。最後に、私が軽い気持ちで工場見学の際ビデオをとっていて、とがめられたこと。働く人の写真の許可もなかなかむずかしかった点からです。現代企業は、みんなしのぎを削って競争しているのです。それが私にはわからなかったのですが、企業秘密をたとえ授業であっても、公開されるのは困る。それだけ工場同志が何度か工場へ出たことも、そうですが、教師側としては、工場に迷惑をかけないように、教材研究をするのが大切だと講師の先生からも教えられました。

さて、授業では、こういった点が生かされませんでした。けれど、O工場の教材化を通して、工場の厳しさ、そして、日本の工業の日進月歩している姿を目のあたりにすることができたということと教材研究の大切さをつくづく実感することができました。(井上小)

全国大会に参加して

山岸 周一

7月17日、小布施中男子バレーボール部にとって、念願であった県大会優勝が実現した。いつも陽気な選手たちも「涙が出ちゃうよ」と喜びをあらわす。「先生の胸上げは」「まだまだ北信越で優勝してからだ」と強気なキャプテン。つい私も「そうだ」と……(しかし、めったにないことなのになあ……と心の中)

そして、金沢市での北信越大会へ。昨年も県二位で、本大会には出場しており、試合にのぞむ布さはなかった。最初から波にのり決勝まで進出。決勝戦では惜しくも敗れたが、目標であった「全国大会」の出場権を得ることができた。

この頃から、「4人アタッカーを平均的に使え、ライトにも一セットに1、2本はあげていい」という指示をセッターにくりかえした。つまり、チーム全員の力があがって、バランスがとれてきたのである。部全体のレベルアップもなされていたのだらうと思う。ひかえの選手も一丸となってくれた。

特に大型と呼べる選手はいないが、みな向上心が強く、自分たちで練習を工夫し、求めていくたくましさをもっていった。選手たち自ら考え出した攻撃パターンもいくつか生

まれた。自分から身につけた力は大きく、確実なものとなっていく、そうしたものは、試合の大事な場面でいかに発揮されるのである。

全国大会は、8月19日から36チームによって仙台市で開かれた。

第4試合目。一試合目から接戦がつづき、予定時間を大幅に過ぎる。緊張がつづく。やっと出番がきた。いよいよよだ。夢にみたコートに向かう足が、なんとなく地につかず、ふわふわとしていたことを今でも覚えている。

「ピッピー」試合開始。はじめは固さが目立ち、サーブさえまともにとばない感じ。しかし、しだいに調子が上がり、一・二セットを連取ることができた。ベスト8をかけた三回戦では、優勝した東雲中に善戦し敗れた。全てが終わった。勝ちたかったという無念さ、ここまでくればとあった満足感、そして、ほっとした気持ちが体中に伝わった。

会場に掲げられた「杜の都にすべての力と感動を」という文字が大変に印象的であり心に残った。多くの感動を選手たちとともに味わえたことに感謝したい。(小布施中)

本年度は算数数学研究委員会が授業をさせていただいた。授業者の立場から自分の問題意識との関わりの中から学べたことも述べさせていただく。

このように書けるのも、算数数学については門外漢の私が自分の思うように授業をさせていただいたおかげである。

私のこれまでの算数の授業は教師主導型であったから、この研究を機会に子どもが主体的に追究する学習を仕組みたいと思った。そこでまず思ったのは、体育のように、学習の初めにオリエンテーションがあり、子どもが自分のめあてを持って取り組む学習ができないかということだった。私には、体育での問題解決的な学習の実践しなかった。ここから分かったことは算数のように未知の事柄について課題意識を持つことの難しさだった。次には、面

積を子どもに意識づけるために陣取りゲームをしたが、教材研究不足で、問題を発見させる場面での角度づけができなかった。

このようなわけで、例えば抽出児の学習カードから学習の流れをみると、

第一時 面積を周りの長さで測ろうとする。

第二時 「いろんなやり方ではかる」という学習問題を作り、測る方法が違うと、面積も違うことになると気づく。

第三時 「広さを数で言えるようにする」で、長さで面積を測る二つの方法のうち、どちらが正しいという問題を

持った。

第四時 前時の問題から、長さでは広さが測れないことが分かった。

第五時 「どういう広さではかれるか」で、一平方センチメートルを知る。

教科書では一時間で扱うところを五時間かけたことになった。

これだけの時数をかける内容でないことは確かだ。算数的な内容の角度づけの重要性を痛感した。

ただ、暗中模索であっただけに、面積の単位を知った時子どもは喜んだし、様々な操作・体験をつんでいくだけに、子どもに対して、かなり強く

教材を提示しても、自分の側から問題をとらえてくれるということも分かった。(予定の時数で単元を終了できた)抽出児は、テストはあまりよくできなかったが、「二期の反省」の中で、「ぼくは算数が苦手だけど、面積のゲームをやっていたりしたら、こういうことが分かったぞ」ということがでて、ぼくも算数がんばった。算数では、先生が答えを言わないで、つきとめるといふのをやりた

い。」と書いた。

こういう子どもたちに助けられた。

また、友達同士で学び合う学習の必要も痛感した。

研究委員会を通して様々な先生方に教えていただいたことを感謝申し上げます。(旭ヶ丘小)

本年度の実践をふり返って

算数(四年 面積)

平林 浩

校章・校歌めぐり

②

仁礼小学校

生守に若葉もえいで」と歌われる校歌は、南部小学校時代昭和四十年の記念事業の一環として作られたと「仁礼小学校百年誌」に記されている。

作詩は時の校長高見本治郎先生で、作曲は月岡弘一氏に依頼して作られた。

豊かな自然に恵まれた仁礼の里の中でも代表的な生守、妙徳山、仙仁川の三つを歌詞に入れてある。

曲想は、全体に潑刺と元氣よく行進曲のようにと曲想表現にもあるように、付点リズムを多用し、弾んだ気持ちを感じさせるもので、特に三段目は付点のリズム、畳み掛けで上昇していくメロディーによって強調されている。

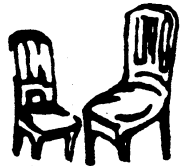
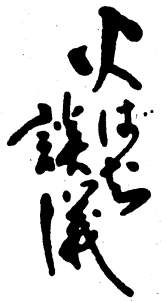
四段目は、少しゆったりし

て、また、強さも抑えられ、最後のフレーズを強くしっかりと纏められている。

校章は昭和四十七年二月校章制定委員会によって協議の末制定された。

上部の山は東三山(四阿山、妙徳山、奇妙山)を表わし、下部は楡の葉をもって仁礼の里を象徴し、五葉は通学区の大字を表し、中央に小の字を浮かせ、自然に囲まれた学舎を表わしている。(大峽栄治)





「熱かった日々」

今井 一 弘

「おう。」いつものように、四人が集まった。思い返すと彼らとのつき合ひも、十数年になるうとしていいる。高校時代同じクラブで汗を流した仲間達である。高校を卒業して今年でちょうど十年になる。もうひと昔前のことなのに、酒量が増すにつれて決まって話題は十年前に逆のぼっていきるのである。

まずは、夏の合宿のこと。きつい練習で有名であった我がクラブの合宿は、今思い出しても、足のふくらはぎにケイレンがきそうなくらいにつらかった。バドミントンとは名ばかりで、一・二年生の頃などは筋力トレーニングとランニングばかり。二日目になると筋肉痛で足が思うように曲がらず、階段は、赤ちゃんのように上はがっていくしかなないのである。

(豊洲小)

私の初任校での事です。もう四十年前の話です。それは、十一月下旬の事で、朝から小雪交りの北風が吹き荒ぶ寒い日でした。教室にはストーブの取り付けが済んでいたのに、急遽試焚きという事になり、一斉にストーブを使用しました。燃料は薪と石炭です。だから取り灰の始末もあって、火の用心には大層気を使いました。その日は私が宿直の番でした。暖房使用期間中は二人で

火事と盗難

小 出 浩

当直する規定でしたが、急な事とあって、誰も都合がつかず、仕方無しに今日だけは一人で当直して欲しいと教頭先生に言われ、不安でした。放課後念入りに巡視をし、更に寝る前十時頃もう一度巡視をしました。隙間だらけの古い木造校舎のガラス窓が、風でガタピシ音を立てていました。一巡すると三十分はかかりました。やっと安心して床に入り眠りに就きました。

突然近くの火の見から半鐘が連打され、人々の立ち騒ぐ声が入りました。「火事だ。」とび起きて宿直の窓から外を見ると、校舎の裏から真赤な炎が吹き上げています。心臓が止る程驚き、まっ青になって、跣のまま走って校舎の裏へ廻って見ましたら、火事の現場は学校ではなく、少し離れた商店街の一角でした。

昨夜の七月に育児休暇を終えて職場に復帰いたしました。母と妻になりきったのんびりとした生活から一変して、一才の娘は保育所へ、私は校舎改築と行事の詰まった学校へポンと入るわけですので、不安にかりたてられたもので、それを鋭く察知した娘は大事な初日に熱を出し、休むわけにもいかず主人に娘をお願いしました。久々に学校に來た私は先生方に暖かく迎え入れられ、再び働けることに娘の赤い顔を思い出しながらも心がはずみました。

身の上話になるのですが、私の父は生前病弱でした。若い頃から入院を繰り返して、入院の時は母も付き添いでいたために姉と私は叔父夫婦に見てもらいました。退院すると、父が始めた電気工事の仕事で母は指示通りに電柱に登ったり天井裏へ入ったりして、真黒になって働いていました。体の不自由な父と電気に無知な母を見て、二人で一人分だと子ども心に思ったのです。姉と私は、学校から帰ると山羊の世話と風呂炊き夕食作り等を分担しては父母の帰宅を待つ毎日でしたが、一度でも不幸だと思つたことはありませんでした。

高校三年の時に就職希望の

働けることに感謝

鳥羽佳代子

私に母が初めて「女だつて働けなければだめだ。お母さんは何も出来ないから、こうしてお父さんの言いなりに動いてお父さん、どこかの奥さん達がおしゃれをして電柱の下を歩いて行くのを見たりすると泣きたくなる。」と話してくれました。

その一言で今の私があるわけですが、子どもを生んでもこの仕事を続けられることに満足しています。協力的な夫と健やかに育っている娘に支えられ、また子持ちの立場をよく理解して下さる先生方の多い職場で働けることに、何よりも感謝しています。

(高山中)

編集後記

本年度最終号の会報130号を「教育活動の総括」と「実践を振り返って」のテーマで編集し、お届けすることができました。

本年度のまとめを大切に、新たな展望を持って新年度を迎えたいものです。

学年末でお忙しいところ早く原稿をお寄せいただいた先生方にお礼を申し上げます。

(中嶋・山岸)